

書 評

原田 哲夫「ロマンス語概説・総論」(1966年)

一口にいて、まことに大胆な本である。著者は日本大学医学部助教授、本会の会員でもある篤学の士、自費出版の犠牲をものともしなかった熱意は、壮とすべきであろう。しかし、その序言にある「著者の知れる範囲では日本語によるこの種の書物は今日まで存在しなかった…」(p. iii)が、この方面にこれまで学者がいなかったとか、見るべき業績がなかった、という含みを持たないことを希望する。というのは、今はまったく忘れられているが、わが国にもかなり古くこの方面の研究を志した図書があった証左があり、最近でも「フランス語研究」第17号(1958)に堀井令以知氏が「入門講座・ロマン言語学・第1回」(pp. 37-40)を書かれており、評者自身も東京教育大学言語学教室の同人雑誌「E209」第5号(1956)と第6号(1957)に「ロマン語学に関する文献概説」(pp. 8-22, pp. 7-19)を書いた事実があるからである。また未刊ではあるが、ある語学専門の出版社から「ロマンス語の話」という小冊子が予定されているそうである。要するに、数多くの(類似しているとはいえ)異なる言語を含み、しかも欧米においてその研究に長い伝統と業績を持つこの分野で、包括的な仕事を発表することは大変勇気が要ることなのであり、われわれ多くの者は自分の能力と資格にまず疑いを抱き、計画を立てる前にためらいを感じてしまうのである。しかし、それだからといって、いつまでもためらってばかりいるのも、けっして感心すべきことではない。その意味において、この本の著者の勇気には、大いに賛辞を呈したい。これが導火線となって、今後より大規模でより充実した概説が、次々と公けにされることを期待しよう。

内容的にも、著者の努力と博識には感嘆せざるをえない。しかし、いくつかの点で大きな不満を感じる。その第一は、原語に見られるミスプリントの多さである。評者が比較的詳しいルーマニア語だけについてみても、わずか5ページ前後に10余りのミスプリントがある。特殊な付加記号の脱落 — *Fiindcă, viața* (p. 15), *cină* (p. 98), *române, Nandriș, Pușcariu* (p. 103) — はやむをえないにしても、p. 13の *firig* (正しくは *frig*), p. 14の *buo* (正しくは *bou*), p. 97の *aș fug* (正しくは *aș fugi*), p. 103の *delimba* (正しくは *de limba*)などの誤りは、不注意と非難されても仕方がない。p. 97の *voiŭ fugi* も、古い文献からの引用らしく、現行の *voi fugi* とかけはなれている。また、ルーマニア語そのものを指す英語の不統一 — *Rumanian* またはその省略形 *Rum.* (pp. vi, 44-45, 55-56 など) と *Roumanian* または *Roum.* (pp. 6, 12-13 など) — も気になる。

第二の不満は、文献目録の不備である。すなわち、古いものについてはかなり詳しい列挙があるのに、この本の発行年度(1966)から見て収録が間に合わなかったとは思えない年代の、多くの重要な文献が抜けているのである。思いつくままに補足してみても、p. 99の2. ラテン語の項に *L. R. Palmer, The Latin Language* (London, 1954), 4. 俗ラテン語の項に *V. Väänänen, Introduction au latin vulgaire* (Paris, 1964), p. 100の5. ロマンス語一般の項に *I. Jordan-J. Orr, An Introduction to Romance Linguistics* (London, 1937), *W. von*

Wartburg, Die Ausgliederung der romanischen Sprachräume (Bern, 1950), 注¹) G. Rohlfs, Romanische Philologie (2 vols; Heidelberg, 1950, 1952), A. Kuhn, Die romanischen Sprachen (Bern, 1951), C. Tagliavini, Le origini delle lingue neolatine (Bologna, 1952), H. Lausberg, Romanische Sprachwissenschaft (2 vols; Berlin, 1956), 注¹) B. E. Vidos, Manuale di linguistica romanza (Firenze, 1959). W. D. Elcock, The Romance Languages (London, 1960), E. Auerbach, Introduction to Romance Languages and Literatures (New York, 1961) など, 8 イタリア語の項に G. Rohlfs, Historische Grammatik der italienischen Sprache und ihrer Mundarten (3 vols; Bern, 1949-54), 9 スペイン語の項に R. Lapesa, Historia de la lengua española (Madrid, 1942), R. K. Spaulding, How Spanish Grew (Berkeley & Los Angeles, 1943), V. García de Diego, Grammatica histórica española (Madrid, 1951), J. Corominas, Diccionario crítico etimológico de la lengua castellana (4 vols; Madrid, 1954-1957), 10 ポルトガル語の項に E. B. Williams, From Latin to Portuguese (London, 1938), 11 ルーマニア語の項に S. Pușcariu-H. Kuen, Die rumänische Sprache (Leipzig, 1943), S. Pop, Grammaire roumaine (Bern, 1948), G. O. Seiver, Introduction to Roumanian (New York, 1953), A. Ciocarnescu, Diccionario etimológico rumano (6 vols; Tenerife, 1958-1961) など, 注²) きわめて基本的なものがあるのは俯におちない。

これと関連して, I. 概論の § 1. 近代言語学の誕生において, 印欧比較言語学の先駆として Bopp, Schleicher, Pott の三人だけが挙げられてあるが, Jespersen (Language) や L. Bloomfield (Language) などに大きく取りあげられている Rasmus Kristian Rask (1787-1832), Jakob Grimm (1787-1863), さらに次の世代にはなるが Karl Brugmann (1849-1919) ぐらいはせめて取りあげてもらいたかったと思うのは, 評者だけではあるまい。欲を言えば, 参考文献にはもちろん含まれてはいるが, ロマンズ比較言語学の先駆として Friedrich Diez (1794-1876) や Wilhelm Meyer-Lübke (1861-1936) の名前ぐらいも, 出しておいてもらいたかった。

それから, 内容的に見るとこの本はほとんど伝統的な音声と語(形態)の歴史であり, 独創的な意見を期待するのはこの分野では無理な注文とはいえ, せめて最近出た R. Posner, Introduction to Romance Linguistics (New York, 1966) のように, 構造主義の原理を応用するなど, 多少なりとも方法論に工夫をこらし, 従来の成果を再編成してみるぐらいの試みはなされてよかったと思う。たとえば, 音の面について, 個々の音声変化をただ羅列するだけでなく, 音の対立関係の変化(すなわち音素変化)についても言及するとかである。

以上, 著者の努力と博識に感服しながらも, 今後いっそうの精進と研究を願うあまり, あえて多くの苦言を提した。もし見当ちがいの暴言や誤解があるならば, 慎んで著者に陳謝し

たいと思う。

注1) いずれもスペイン語の改訂訳がある。

注2) ルーマニア本国では原語の文法や辞典に数多くすぐれたものが出版されているが、ここでは省略した。

(東京教育大学助教授 田中春美)

直野 敦「ルーマニア語文法入門」

(大学書林・語学文庫 / 1967年) ¥ 350

わが国ではじめてのルーマニア語入門書として、本書の存在意義は大きい。日本で刊行されたルーマニア語学書は、評者の知る限りでは、これ以外には1940年に限定出版された「羅日辞典」(フロンドール・根津・林・青山共著、杏林舎印刷)しかない。著者は数年間ルーマニア本国に留学、文学・語学両方面にわたって研究を積まれたので、今日望まれうる最適任者と思われる。原田氏と同じく、本会の会員でもある。

発音の簡単な解説から始まり、21課にわたって文法のおもな特徴をもれなく挙げ、ほとんどの課に短い練習問題をつけてあるので、自習書として便利である。付録の単語集と練習問題の解答も、大いに役に立つ。しいて不満な点を探せば、紙面の関係でやむをえないにせよ、形態論の分量に比べて統辞論についての言及が少なすぎることに、例文の複雑さを考えた上での配慮と思われるが、第6課の疑問代名詞と第21章の関係代名詞は語彙上ほとんど重複するので、隣接して扱うほうが便利と思われること(げんにPopやNandrisもそのように扱っている)、ぐらいのものである。参考文献(p. 13)はやや不足だが、数の割にはよく配慮して選ばれてある。ミスプリントも、たまたまこのページにNandrisのような例はあるが、全体的に見て目立つほどはない。

もちろん、この本を自習しただけで、ルーマニア語が使いこなせるようになるとはいわくもないが、本の厚さからすればギリギリのminimum essentialsが盛りこんであり、その意味では最上の入門書といえよう。今後これを補うものとして、前述の「羅日辞典」にかわる辞書(できれば日羅も)と、程度のやさしいリーダーか文学選集の出現が望まれる。今のところは、ルーマニア本国で出ている羅英・英羅辞典や、二三の国で出ている文学選集——たとえばE. D. Tappe, Rumanian Prose and Verse (London, 1956), A. Guillerrou, Textes d'étude en langue roumaine (Paris, 1960), Munteanu, Rumänische Anthologie (Halle, 1962)など——を取り寄せて補習する以外に手はない。

(東京教育大学助教授 田中春美)